

「弁当の日おいしい記憶のエピソード」 作文コンクール入賞者発表！



【キッコーマン賞（中学生第1位）】 2年A組 新居 モエ

2020年度2年生AB組（チャレンジャーコース）は夏休みに、共同通信社が主催する「弁当の日 おいしい記憶のエピソード」に挑戦しました。これは自分で料理をした体験談（＋写真かイラスト）を書く小中学生対象の全国コンクールです。全国から2951点の応募があり23名が入賞。盈進中学校からは、2年A組（現3年A組の新居モエさんが中学生の部全国第1位である「キッコーマン賞」を受賞しました！

受賞作「祖母が教えてくれた「生きがい」

私の初めてのお弁当作りの思い出は、三年前の春にさかのぼります。私は料理がとて苦手です。しかし、そんな私がふとたまっかけてお弁当を作るようになったのです。

毎年、私たち家族は、祖母たちとお花見へ行くのですが、そのお弁当作りは祖母と私の母が担当しています。しかし、私が小学五年生のその年、お花見のお弁当作りの日に母が行けなくなり、そのかわり急遽私がお弁当を作るようになったのです。それが人生初のお弁当作りのきっかけになりました。

初めてとりかかったのは定番の玉子焼きです。卵の黄身と白身が分離しないようにしっかりと混ぜ、砂糖にしょうゆ、とりから味付けをし、何回にも分けて卵を入れ、きれいな形になるように焼き上げました。次におにぎり。私はここで祖母からきれいに握るテクニックを学びました。お米を持つ前に手を塩水でぬらして握るのです。きれいな三角形にするのは難しかったけれど、なんだかとても楽しかったのを覚えています。沢山のおかずを作っている間、私はあることに気がつきました。それは祖母が料理をしている間中、ずっと鼻歌を歌っていたことです。私は気になって聞いてみました。「料理、楽しい」と。そうするに祖母は「これはね、私の生きがいなのよ。」と答えました。

私にはその時、祖母が言った「生きがい」という意味がよく分かりませんでした。たしかに祖母の家へ行くたびに毎回キッチンで料理をしている祖母の姿をよく見かけます。そして、いつもおいしいご飯を食卓に並べてくれます。だけれどやっぱり生きがいという意味が分かりません。

お花見当日、私と祖母でつくったお弁当を校の下で広げました。色鮮やかなお弁当を囲んで、そこにいそみんが「おいしい。」と言って食べられました。祖母はとても嬉しそうに顔でその様子を見ていました。祖母が言う「生きがい」とはこういう事なのかもしれない、私はその時思ったのです。

中学生になって毎日お弁当を作ってもらっています。母は何も言いませんが、きっと私の「おいしい」という一言を思い描きながら作っているのだと思います。祖母が教えてくれた「生きがい」とは家族を思う心なのかもしれません。私はこの作文を書いて、改めてお弁当を作ってくれる人の思いをかみしめながら食べたいと思うようになりました。そして私にこのことを気づかせてくれた祖母にも感謝の気持ちでいっぱいです。